



2014 第4回 全国石炭産業関連博物館等研修交流会 — 常磐

1 日目 2014年10月18日(土)

1. 山神社・湯揚場

釧路、長崎、筑豊に引き続き炭鉱町で開催される「全国石炭産業博物館等研修交流会（以下、全炭博研）」も既に4回目。常磐線を北上して集合場所である湯本駅に到着すると、駅前にはかなりの人だかり。総勢40名を越える参加者と言うから、その熱気もかなりのもので、温泉の町でもある湯本にふさわしく、最初の会場であるいわき市石炭・化石館（通称ほるる）へ向かった。



道中の安全を祈る意味も兼ねて、館の近くにある山神社へ参拝。神社は今でも常磐興産が管理を行っている。普段は人もまばらであろうこの境内に全国から石炭に関係する人々が集結するのは、なんとも壮観と言うしかない。周辺域はかつては炭鉱関連施設が残り、現在道路になっているところには自治会館という集会施設も近年まで残っていたそうだが、取り壊されたという話を伺うと、現代の視点ではあるが何とももったいないという思いを禁じ得ない。



続いて向かったのは、湯本温泉の源泉を汲み上げる「揚湯場」という施設。書き間違いを起しそうな名前であるが、こちらの施設では、かつて坑内で湧き出ていた湯をそのまま5基のポンプで地上へと汲み上げ、スパリゾートハワイアンズをはじめとした湯本地区の温泉施設へ供給しているという。炭鉱閉山後もなお、坑内には80℃の熱湯が毎分5.5トンの湯が自噴しており、これが直径40cmのパイプを介して地表へと汲み上げられるのだが、なお58℃の高熱を持っている。近年開削される温泉では温度が低く加温されているところも多い中で、何ともうら

やましい話であるが、この熱が炭鉱現役時代には坑内員を苦しめていたというから、実に皮肉な話と言える。1971（昭和46）年の閉山後に斜坑空間を利用して作られたポンプは、現在に至るまで大規模なメンテナンス等が行われていないようで、質疑応答はこの将来における修理はどうするのか、などの質問が挙がったが、確かに将来的に気にかかるころではあるが、温泉の水位は上昇しており、問題はないとの説明があった。

2. いわき市石炭・化石館（ほるる）

もと来た道に戻り、いわき市石炭・化石館展示施設を見学する。ここではフタバスズキリュウに代表されるいわきで発掘された化石と各種の世界で発見された恐竜や首長竜の化石展示を見学するとともに、模擬坑道に代表される常磐炭田の採掘状況再現展示と館の裏手にあった斜坑跡地の緑地空間を見てまわった。



いわき市石炭・化石館は、1階が化石展示、2階が石炭を中心とする地質に関する常設展示、さらに地下の模擬坑道がある。ソ連崩壊期に購入した化石展示などは現在では考えられない貴重な品であり、なるほど創立30年を迎えた歴史ある館ならではの貴重な遺物である。これら展示品も2011（平成23）年3月11日の東日本大震災では震度6強の揺れがあったという。落下物等はなかったものの、化石展示に関してはいくつかの展示の損傷があったようだが、模擬坑道に関しては支保工のゆがみなどなかったとのこと。炭鉱OBによる本格的な整備あつての被害ゼロではないかと思えてならない。

2階にある地質展示コーナーでは、いわき周辺の地層、また全国各地で採取された石炭標本が展示されている。和歌山や岡山などでも石炭が採取されていたことにびっくりするとともに、それらが貴重な標本であることを確認した。

一旦外に出て野外展示場に移動する。石炭・化石館の裏手に当たる「六坑苑」では、かつての人車坑が復元整備されている。ここはかつて昭和天皇も入坑した常磐炭田を代表する坑口であり、それを記念した写真展示の掲示板や記念碑などに石炭・化石館の場としての重要性を感じ取ることが出来た。

再び館内に戻り、常磐炭田の歴史に関するコーナーである地下模擬坑道施設を見学。前述した木材による多様な支保工やカッペ支柱が林立する様は実に壮観であったが、一番衝撃を受けたのは、採掘当時坑内にあったという「水風呂」であった。高熱と温泉との戦いであった常磐炭田特有の熱中症対策として作られた設備で、塩と梅干しを摂りながら採掘を行っていたという現場の姿を想像すると、それは私の地元八幡製鐵所の作業現場とオーパラップするところが多々あり、感慨深かった。

（市原 猛志：北九州市門司麦酒煉瓦館）



3. 講演

ほるの見学後、15時59分から17時08分まで、常磐炭田史研究会・皆川國生副会長による講演が行われた。

「いわきの地域特性を考える」皆川國生（東日本国際大）

常磐炭田の主要炭鉱である常磐炭礦(株)の企業活動、閉山に至るまでの背景を、いわき及び周辺の地域特性や歴史と関連付けながら紹介した。

まず地質時代から中世・近世までの当地域の自然・歴史・民俗・社会を概観のうえ、近代的経済構造の成立過程では基幹産業としての農業（稲作と副業の養蚕）があった。幕末には磐城国の片寄平蔵、常陸国の神永喜八により石炭の採掘が始まり、駄送・和船積込で京浜市場への出荷が行われた。常磐炭は必ずしも高品位ではないが、消費地に近い利点から工場で重用された。1884（明治17）年には地元勢と浅野総一郎・渋沢栄一・大倉喜八郎らによって磐城炭礦社の設立に至り、1893（明治26）年の商法施行で株式会社化された。石炭の海上輸送は海難事故や効率などの点で問題があり、1897（明治30）年に日本鉄道磐城線が水戸～平で開業すると消費地へ直結の鉄道輸送が可能になった。この間、いわきでは1895（明治28）年に入山採炭株式会社、1897（明治30）年には三星炭



礦株式会社（のち磐城炭礦へ）、1906（明治29）年に好間炭礦株式会社（のち古河合名へ譲渡）が設立されている。これら炭鉱と磐城線沿線の駅は軽便鉄道などで結ばれ、鉄道は中小炭鉱の石炭輸送にも応じた。なお、福島市には仙台よりも早く日本銀行の出張所・支店が開設されたが、いわきを含む浜通りでは銀行自体の設置の遅れや金融恐慌による銀行消滅があり、資本の蓄積は十分とは言い難かった。

第二次世界大戦中は、1942（昭和17）年の企業整備令、1943（昭和18）年の戦力増強企業整備要綱により炭鉱の整理・統合が促進され、1944（昭和19）年に磐城炭礦と入山採炭の合併で常磐炭礦(株)の成立に至る。戦後になると、経済再建の鍵となる炭鉱復興のため傾斜生産方式や復興金融金庫の傾斜金融による炭鉱への資金と物資の集中、炭鉱の国家管理、配炭公団による石炭販売の統制が推進された。その結果インフレが進行したため、ドッジラインによるデフレ政策がとられることになった。朝鮮戦争の特需を得て石炭業界は息を吹きかえしたが、今度は高炭価問題、石油とのきびしい競合に直面する。所謂エネルギー革命は、1950年代後半から1960年代前半に起きた一般炭から重油への転換と、1960年代後半に進んだ原料炭の輸入炭への切替に分けて（二重構造として）考えるのが合理的である。炭鉱の閉山は地域リーディングセクターの消滅を意味し、地域存亡の危機に繋がりがねない。常磐炭礦(株)は、労使協調や行政との連携のもと、脱石炭の緩やかな合理化と多角化（例えば、常磐開発、常磐共同火力など）策を採り、事業の再構築（リストラクチャリング）を図った。時間の都合で、新産都市指定といわき市の誕生、原子力発電誘致と地域振興、東日本大震災・津波・原発被害と地域および企業活動サステナビリティの紹介は簡略化した。

4. 3分スピーチ

講演の後は夕食・情報交換・出版物即売会へ移行した。執筆と刊行にかける熱意、自らの仕事を出版物を通して多くの人に知ってもらいたいという思いは、本業が地方公務員とは思えない熱の入った売り込み合戦として現れていた。いずれも短時間のうちに完売となったのは、いかにも全炭博研といえよう。続いて17時56分から19時30分まで、休憩1回を挟み、恒例の3分スピーチが行われた。概要は発表順に次のとおりである。



小宅幸一：東日本大震災の復興と市制50周年の記録化を進めている。エネルギー・地域・炭鉱がキーワードの仕事である。

野木和夫：聞き書き「常磐炭田エピソード100」の刊行に続き、常磐炭田にあった炭鉱会社の盛衰図を作成してHPにアップする予定。

石川孝織：日本唯一の現役海底炭鉱・釧路コールマインを多くの方に知っていただきたく記録と情報発信を進めている。

中澤秀雄：JAFCOF（産炭地研究会）は緑本（宇部）、赤本（赤平）、黄本（空知）報告を刊行した。青本（釧路）と北炭・笠嶋氏資料の出版を目指している。

鮎沢潤：北海道と九州で、全炭博研を通じた人の繋がり、新たな発見を実感した1年であった。

久遠龍史：長崎の石炭産業遺産を活用・保存する取り組み（成果等報告会参照）の1年だが、長男の成長も嬉しかった。

松村真人：各地の鉱山都市を訪ね写真記録を行っている。なかでも羽幌炭鉱は先例が少なく、やり甲斐がある。

市原猛志：田川市内の石炭産業遺産の自転車巡りと、鈴木商店（太陽鉱工）のバーチャルミュージアム充実を行っている。

熊沢幹夫：いわきヘリテージ・ツーリズムと常磐炭田史研究会の活動を通し、来客から「案内していただいて良かった」との反応が嬉しい。

皆川享智：ヘリテージ・ツーリズム、被災者支援、生涯学習友の会の活動を行っている。民間記録は一層重要になる。

木山利昭：池島で頑張っている。軍艦島は良きライバルである。猫と猪のおもてなしでお迎えする。

清水憲一：いわき市石炭・化石館の模擬坑道は非常に感心した。週2日は田川市石炭・歴史博、1日は大学へ出勤である。

藤永徹也：宇部の炭鉱住宅で育ち、高萩に勤務先の鉱業所があった事で常磐との縁を感じる。子ども達と江戸時代の炭生（たぶ）を保存している。

脇 彌生：いわき市石炭・化石館の音響効果や動く展示物はリアリティーがあり、大変興味深く拝見した。

池田一子：宇部から初参加である。2014（平成26年）年7月にいわき中央台北小学校の30名を案内し、常磐との縁を感じる。

石井央昭：高萩で炭鉱跡地の管理から炭礦資料館の開館に至った。大きいとはいえないが、ホットな雰囲気でお迎えする。

吉久保 忠：菊池寛実記念高萩炭礦資料館の縮尺1/600ジオラマは必見である。是非、ご覧ください。

<ここで3分休憩>

鹿田次人：最終日（10月21日）に菊池寛実記念高萩炭礦資料館をご案内する。お楽しみください。

嶋崎尚子：本日（10月18日）の研究成果等報告会と明日（19日）のパネルディスカッションで詳細をお話します。

Lim, Tai Wei：研究成果等報告会で嶋崎教授の発表に関連する話題提供（中国の石炭資源、常磐・九州炭田研究）を行う。

渡辺文久：石炭・化石館のお褒めをいただき面映い。この1年は江戸時代に係る仕事を主に進めたが石炭との接点もあった。

萩原義弘：北海道から九州・沖縄にわたる写真を撮り続けている。コールタール塗布紙を屋根に葺いた常磐の炭住は印象深い。

小島伸夫：北炭夕張新鉱の事故当時、札幌の放送局に在職し報道に携わった。詳細は研究成果等報告会でお話します。

青木隆夫：今年には日本の大規模炭鉱災害（若鍋と方城）から100年である。常磐は3回目だが鉱夫像など興味深く思う。

佐藤富喜雄：城山小学校に保管している（旧）太平洋炭礦資料の、市立図書館での更なる活用が待ち望まれる。

高橋史弥：博物館の調査研究活動と三笠の記憶を残す座談会を通して、研究の一層の展開を目指したい。

伊佐治知子：みかさ炭鉱の記憶再生塾は旅行者・来訪者の評価を得ているが、行政や地元での浸透を図り頑張りたい。

皆川國生：講演「いわきの地域特性を考える」の前に、皆さんのスピーチをお聞きできたら良かった。

Park, Sung Won：建築計画および都市計画の視点に基づく日本の炭鉱住宅の研究で学位論文を準備中である。

三輪紀元：雄別炭鉱勤務時は事務職であったが退職後に技術を勉強し、「技術職でしたか？」と問われるようになった。

前田和男：大原孫三郎が戦前に設立した労働科学研究所の月刊研究誌「労働の科学」で「炭鉱（ヤマ）から生まれた仕事唄」を連載中。

大月敏雄：住宅設計と計画が専門であるが、長期居住や空き家問題の先行例である炭鉱住宅から学ぶべき点は多い。

谷口尚弘：美唄の炭鉱住宅を対象に町づくりや都市再生の調査研究を進め、大月教授と共同研究を展開中である。

橋本泰作：人口減による都市のシュリンク、次いで都市の放棄の問題を考えるうえで炭鉱住宅の研究は参考になる。

清水 拓：文学部採鉱学科を自認する。太平洋炭鉱、昭和38～42年、2番層採炭の労働過程に関しヒアリングと文献調査中である。

渡部邦昭：博多湾鉄道について研究成果等報告会でお話する。筑豊鉱山学校の資料整理も進めている。

豊田祐子：現役の垂炭鉱で現場を見つつ総務と経理の仕事を行っている。映画「フラガール」のロケが行われた炭鉱である。

馬目太一：全炭博研フォーラム in 常磐のお世話役となった。本業の日本放線菌学会で受賞論文締切を控えているが、4日間を務めさせていただく。

渡辺晃也：東洋史を修め、現在はいわき市役所の福祉部局に勤務している。戸別訪問先の屋根がコールタール塗布紙で葺かれていて石炭との縁を感じる。

5. 研究成果等報告会

5-1. 炭鉱住宅地の変容

大月敏雄（東京大学）・朴晟源（東京大学）・谷口尚弘（北海道科学大学）・橋本泰作（住環境研究所）

建築学の中でも住宅計画を専門として研究を進めているが、炭鉱住宅（炭住）は興味深い対象である。空き家になった炭住、撤去された炭住、撤去後の改良住宅化・再開発・ときに原野化などの変化を時間的・空間的に追跡すると、誰の意志で町が変わるかを読み解くことが可能になる。国会図書館資料や住宅地図などの紙媒体情報に加え、往時の関係者および住民へのインタビューを通して、例えば町の維持に必要な機能などが把握できると考えている。

ここでは北海道空知、福岡県筑豊、長崎県の島嶼に位置する炭住をとりあげ、住宅地の変遷および分析の実例をスライドで示した。夕張では「集約型」の住み替えや「自然型」が、美唄では「衰退型」、田川は「改良型」（同じ筑豊でも飯塚では住宅地化）、西海市大島は人口自体が減少傾向にあるが「復興型」に位置付けられる変遷が、それぞれ見出された。この研究で得られた変遷の記録と解析事例は、今後の日本で起こるさまざまな住宅問題の予測および解決（特にコンパクトシティ化以外の途を探る）のうえで貴重な材料となる。



5-2. 石炭産業研究、雑感：国際化と次世代

嶋崎尚子（早大） 常磐炭礦の閉山では5,000人の労働者が失職し、単一の企業の撤退に伴う離職者数としては今なお最大である。演者は1995年にいわきを訪れて以来、詳細な追跡調査に基づき炭鉱離職者のキャリア再構成の研究を実施してきた。現在、石炭政策と離職者対策（1955-2012）の経緯をコンテキストに据え、

- 1) 石炭政策下での離職者支援の概観
- 2) 石炭政策下での最後の閉山における離職者支援と再就職
- 3) 石炭政策と離職者対策・支援、ポスト8次石炭政策の離職者支援

の3点から論考をまとめている。

本日の皆川先生の講演から、常磐炭礦での離職者対策・支援とその成功が、その後の石炭政策（産炭地域振興・離職者対策を含む）におよぼした影響を明らかにするという、次なる課題が明確になった。



また、炭鉱の経験や「記憶の記録」をめぐる方法論的な検討、子ども達の炭鉱社会での経験がその後に与えた影響の評価、日本の鉱山技術移転を通じた東アジア-日本の比較、などの形で研究は、更に発展しつつある。これらの活動および過程では、次世代への継承が良好に機能している。例えば、学部学生を対象とするゼミ「『生きている炭鉱』と釧路研究」では多くの学生・若手研究者とともに、日本唯一の海底炭鉱のある街・釧路を実際に訪れ、関係者へのヒアリングや文献調査、施設見学を行っている。石炭産炭地研究会（JAFCOF）—学生—全炭博研—地域および企業のDomesticな連携と両立を図りながら、Globalな連携も着実に展開しつつある。

5-3. 「石炭産業研究、雑感：国際化と次世代」の関連発表

Lim, Tai Wei (National University of Singapore)

While market-reform era industrial development was planned in the southern coastal provinces in China (known as the "Special Economic Zones" or SEZs), major coalfields, reserves as well as collieries are located geographically in northern region. To distribute northern coal to southern provinces, more north-south railway systems are needed to transport coal resources in order to reduce bottleneck situations. These long-distance railways are even more crucial in the future because future supplies may come increasingly from the coal reserves found in the northwestern regions located even further way from the south. Because of bottlenecks caused by overburdened railways and the need to make delivery more efficient through investments and technologies, the importation of Australian coal presents itself as an affordable alternative to domestic coal for the manufacturing sectors in the southern provinces.

On another point, the Chinese authorities are rationalizing the coal mining industry by shutting down some inefficient and/or illegal smaller-scale coal mines (some are family-owned, others are Towns and Villages Enterprises or TVEs),

Japan serves as a possible reference in terms of policies in managing coal mine shutdowns for the local economies, given the need to accommodate the livelihoods of former coal miners (analogous to some features in the rationalization and eventually decline of Japan's coal mining industry during the 1950's to mid-1960's though Chinese numbers are at an even bigger scale compared with the Japanese case). Japan's gentrified coal mines could also provide some reference point for post-closure policies, including environmental cleanups, local eco-friendly tourism and/or heritage preservation.



5-4. 長崎の推進活動

久遠龍史（軍艦島コンシェルジュ）

世界遺産を如何に活用するか、長崎の石炭産業関連遺産では何ができる（できた）かに関し、これまでの取り組みを報告する。

2011（平成23）年当時、産業遺産に対する市民と行政の認知度は必ずしも高くなく、長崎の世界遺産といえば教会群との見方が主流であった。演者らは、山本作兵衛展の長崎での開催、全炭博研の長崎への誘致、市民団体との共同活動などを通して、市民および政・財・官・学界、マスメディアへの情報発信を図った。結果として海外の近代化産業遺産の専門家が相次いで長崎の石炭産業施設群を視察するに至った。

このような経緯のもと、2013（平成25）年には内閣官房などが発起人となって産業遺産国民会議を立ち上げ、2014（平成26）年の産業遺産国際会議で講演を行った。同年は長崎港外に位置する端島炭鉱の閉山40周年でもあり、「端島炭鉱古事記」や「大端島展」の開催に至った。このほか、端島や石炭と関わりのある周辺島嶼をロケ地とする大手映画会社の撮影なども進み、インパクトのある情報の更なる発信が期待される。長崎の石炭産業関連遺産は過去の遺物ではなく、未来へのランドデザインとなり得るものであり、全炭博研および会員の皆様の更なるご理解・ご支援をお願いする。

5-5. 博多湾鉄道汽船と海軍炭鉱

渡部邦昭（九州歴史資料館）

博多湾鉄道（博多湾鉄道汽船を経て現在のJR香椎線、西鉄貝塚線）は、福岡市東方の糟屋炭田に位置する海軍炭鉱の石炭積出しを主な目的に設立された鉄道会社である。糟屋炭田には、新原[しんばる]採炭所、のちの海軍採炭所、閉山時は国鉄志免[しめ]鉱業所となる炭鉱があった。この炭鉱の運炭鉄道として、博多湾鉄道は1903（明治36）年に西戸崎[さいとざき]～須恵を開業させる。1905（明治38）年に宇美まで全通し、1907（明治40）年には酒殿[さかど]～志免の支線も開通している。



博多湾鉄道汽船の経営状況を、現代の有価証券報告書に相当する営業報告書に基づき、分析を試みた。まず、貨車収入と客車収入を比較すると、1912（大正元）年から1940（昭和15）年の間、ほぼ全期間で貨車収入が客車収入を上回っている。ただし1931（昭和6）年から1932（昭和7）年の間は貨車部門の落ち込みに伴って全体収入も低下している。博多湾鉄道は海陸連携のため1919（大正8）年に海運業へ進出し、1920（大正9）年には会社名を博多湾鉄道汽船に改めた。これにより海軍炭を呉、佐世保、徳山、朝鮮の鎮海湾などに送出することができたが、帰路は空船に近い問題があった。このため船舶事業の収入は鉄道事業並に上げるものの、利益率は低く、事業開始後は会社全体の利益率も著しく低下させている。また、鉄道事業も福岡市から飯塚への新線が計画されたが実現に至らず、1924（大正13）年から1925（大正14）年に新博多～宮地嶽（現 西鉄貝塚線）の開業にとどまった。ただし、これは以降の客車収入の増加に貢献している。

1912（大正元）年から1940（昭和15）年の間の営業報告書等に基づき、採炭所生産高、鉄道輸送量と船舶輸送量、さらに鉄道・船舶事業の収入をみると、いずれも1930（昭和5）年の海軍軍縮条約までは順調に推移する。軍縮期の1931（昭和6）年前後の採炭所生産高の落ち込みは全収入の低下に繋がっている。なお、この鉄道会社の石炭輸送や海軍炭鉱の石炭生産は、福岡県全体の石炭産業とは異なる傾向にあることに着目すべきであり、国営炭鉱を相手とした民間事業者の経営をみるうえでも、興味深い会社といえる。

以上に加え、筑前参宮鉄道（のちの国鉄勝田線）との関係、現在の西日本鉄道とJR九州への変遷、沿線の鉄道遺構についても写真等を用いて紹介を行った。

5-6. 三笠市幌内墓地・弥生墓地の友子の墓における墓石情報の変化について

高橋史弥（三笠市立博物館）

北海道三笠市幌内墓地・弥生墓地で友子の墓に記録された情報に着目し、北海道へ移住した炭鉱労働者の意識変化の追跡および分析を行った。友子とは広義の鉱山労働における親分—子分の関係ないしは組織であり、友子の墓には死者（親分）と建立者（子分）の名前および出身地が記録のうえ、原則として親分一人のみが入る。場合によっては、名前の代わりに戒名や法名等が記録される場合もある。友子の墓の先行研究において十分な検討が行われていなかった、子分の出身地が記録されなくなった時期の特定、友子の墓が「家」としての建墓に変化する時期の特定、それぞれの原因の検討を目的に、幌内墓地で1896（明治29）年から1929（昭和4）年までに建立の61基、弥生墓地で1903（明治36）年から1946（昭和21）年までに建立の60基、計121基について実地調査と併せて聞き取りや文献調査を実施した。

出身地の記録は、親分・子分ともにあり（Aタイプ）、親分のみあり（Bタイプ）、子分のみあり（Cタイプ）、親分・子分ともなし（Dタイプ）の4通りに細分し解析を行った。その結果、AタイプからCタイプを経てDタイプへの変遷が認められた。すなわち、親分の出身地記録は、幌内墓地で1902（明治35）年から減少し1906（明治39）年以降はほぼ無くなり、弥生墓地では1916（大正5）年以降に見られない。子分の出身地記録は幌内墓地で1906（明治39）年以降ほぼ無くなり、弥生墓地では1921（大正10）年から減少し1924（大正13）年以降は、ほぼ見られない。このような変遷の原因として、北海道に定着した炭鉱労働者の二世・三世が誕生し、北海道が故郷であると考えられるようになった点が挙げられる。また、墓が個人のものから血縁的關係者など複数人が入るものへの変化があり、墓に出身地の記録が見られなくなるのと期を同じくしている。1905（明治38）年から飯場[はんば]が順次撤廃され、家族や生活の基盤を持つことで家族主体の墓（血縁的關係者など複数人が入る）への転換と、それに伴う出身地の記録の消滅が考えられる。なお、取り壊される墓や祭祀されていない墓が今回の調査でも認められている。

5-7. 北炭夕張新炭鉱

小島伸夫（夕張地域史研究資料調査室）

北海道炭鉱汽船(株)傘下の夕張新炭鉱（以下、夕張新鉱）は同社の経営立て直し策の中核に位置づけられていたが、1981（昭和56）年10月16日に発生したガス突出事故のため1982（昭和57）年10月14日の閉山へ至った。当時、私は札幌の放送局に勤務し、事故直後から閉山に至るまでの報道・番組制作に携わった立場から、夕張新鉱をめぐる状況を整理したい。

夕張新鉱は、北炭が夕張一鉱、二鉱、平和鉱の各炭鉱を集約し、1975（昭和50）年6月1日に営業出炭を開始した北炭の新鋭炭鉱であった。しかし、その年の11月に三笠市の幌内炭鉱でガス爆発により24名の死者を出した同社は、夕張新鉱の日産5,000トンを目ざす再建計画で経営の立て直しを図ったが、深部採炭による厳しい自然条件と坑内員の出稼率の低下で出炭不振に陥っていた。当時の時代背景に照らすと、国内炭2,000万トン生産体制のかけ声とは裏腹に、会社全体としても出炭計画を達成できず、1980（昭和55）年8月には夕張新鉱で坑内火災が発生。45日に及ぶ操業停止で再建計画は練り直され、通産省（当時）の厳しい指導が入り、同社は苦境に立たされた。炭鉱の深部開発では従来に増して保安が重要になるが、「保安と生産の天秤」状態は冒頭のガス突出事故を引き起こした。炭鉱災害で頼みの綱となる救護隊が搬入した資材に帯電した静電気で（後の調査で）二次災害（坑内火災）も引き起こし、生存が確認されていた15人と救護隊10人との連絡が途絶え、最終的に59名を坑内に



残したまま、注水による鎮火を行わざるを得なくなった。その過程で、早過ぎる救護活動の中止を判断した会社の対応に犠牲者の家族からの強い反発が起こり、事態の收拾が遅れてしまった。良くも悪くも「大らかな」会社の体質が、危機管理の弱さを露呈してしまった。「救護活動は少なくとも24時間は継続すべき」などリスクマネジメントの感覚が低かったことは否めない。また、このような重大災害で指揮をとる社長が、通産省に約束した再建計画達成のため、3年前に本社経理部副部長から大抜擢された、ヤマ元での経験の少ない人物であったことも事態收拾がうまくできなかった要因と思われる。

新鉱のガス突出事故は、同鉱の閉山、会社倒産のみならず、その後の日本の石炭政策にも影響を与えた。国内炭2000万トンとした第7次石炭政策の根拠を失わせ、石炭産業の縮小・衰退を加速させていった。昭和62年度からの第8次石炭政策では「生産目標は年産1000万トン、段階的縮小はやむなし」となった。当時操業していた大手の12炭鉱は、その後次々と閉山し、現在では太平洋炭礦を引き継いだ釧路コールマインだけになってしまった。

5-8. 研究所事業とこれから

清水憲一（田川市石炭・歴史博物館）

山本作兵衛氏の炭坑記録画はUNESCOの記憶遺産（MOW）として広く知られるところであるが、今後の研究に待つ部分も少なくない。例えば、「動いている（動きを伴う）画」については用語の正確・適切な注釈に加えて当該作業ないしは動作自体の説明が必要である、水彩画の製作年が判明しているのに対し墨絵は把握できていない、などが挙げられる。

田川市立石炭・歴史博物館附属研究所では山本作兵衛コレクションの整備を次のように進めている：

1) MOW関係

目録とデジタルデータ化を行い原則公表。記録画、作兵衛ノート、日記、雑記帳、自筆原稿からなる

2) 関連資料

収集とリスト作成を完了ないし継続中。作兵衛画集・著作刊行物、論文・雑誌記事などの作兵衛論、新聞記事集、TV放映／画像、写真類、企画展／パンフレット、作兵衛が働いた炭鉱の写真・資料・文献類、国内外で描かれた炭鉱の労働・生活・景観に関する資料

これらを通して、従来は不明確であった複数の事項が解明されつつある。

また、作兵衛ゼミナール（研究所長講座）の開催、三井田川鉱業所の閉山50周年を機に共同研究（鉱業所の正式な社史は未刊）を開始している。これらに加え、世界の炭鉱労働と生活の歴史における世界共通の記憶、炭鉱労働（女子・児童労働を含む）と協同的生活、社会的差別とその克服などに関して絵画・写真・絵葉書などの資料を収集のうえ、比較研究を展開したい。国内の炭坑画・写真集・画像などの記録のリストは作成されていないが、全炭博研との共同事業が期待される。

このように全炭博研 in 常磐は初日から極めて充実した内容で、本来の閉館時刻を大幅に越えた22時14分に閉会となった。当日は「ほるる」開館30年の記念すべき日で、恐らくは多忙な館務や行事予定を遺繰りしての受入であることは容易に察せられた。会場を提供して下さったいわき市石炭・化石館、多方面にわたる親身なお世話をいただいた常磐炭田史研究会およびいわきヘリテージ・ツーリズム協議会の皆様に改めてお礼を申しあげる。

（鮎沢 潤：福岡大学）

2日目 10月19日(日)

1. 好間地区

午前8時に貸切バスでホテルを立ち、好間地区へ向かった。2日目のスタートである。出発から20分程度で、かつて古河好間炭砒の鉱業所が立地していた高台に到着した。まず熊野神社を訪れた。熊野神社は、好間の地に西暦771年に創建された歴史ある神社である。何度か移転を繰り返したのち、大正時代に古河好間炭砒の開発を受けて現在地に遷座した。ここで、昇殿参拝をおこなった。神主が祝詞をあげ、代表者3名が玉串を奉納した。その後、神主の吉田氏より、古河好間炭砒にまつわる話をいただいた。吉田氏は古河好間の往時の姿を知らない世代ではあるが、神社に集う人々からいろいろな話を聞いており、炭砒に親しみを感じているとのことであった。



この高台には現在でも古河の事業所が立地しており、閉山後の雇用確保に大きく貢献している。その敷地内には炭砒の福利厚生施設として建てられた旧古河会館が現存しており、現在では工場として利用されている。

その向かいの坂を上がっていくと、左手に「産業戦士の像」が現れる。軍需産業で働く労働者の激励のため、1944（昭和19）年に軍需美術推進隊の手により制作されたコンクリート製の像である。当時は「進発」という勇ましい名であった。全国11箇所に建立されたうちの1体である。常磐には2体あり、もう1体は石炭・化石館の前に「坑夫の像」という名で現存している。

高台を後にし、次に訪れたのは、好間川に架かる古河好間炭砒専用鉄道の橋梁である。橋桁には枕木とレールも残されていた。橋脚から覗く赤レンガに明治時代の面影を見た。好間川対岸の奥には古河好間炭砒の火力発電所の巨大な建屋も現存している。

2. 内郷地区

続いて、内郷地区へと向かった。車窓から見える三星炭砒の煙突や、常磐製作所、気動車車庫等について説明を受けた。まずは、常磐炭田における石炭発見の地、弥勒沢の「みろく沢炭砒資料館」を訪れた。コールタールを



塗った紙の屋根の建屋の中に、コールピックやカーバイドカンテラ、写真、ポスターなど、様々な資料が所狭しと並んでいた。これらは全て、炭砒で働いた経験のある渡邊為雄氏が個人で収集した品々である。そこで地元ボランティアによる紙芝居「片寄平蔵物語」を観覧した。この紙芝居は、震災復興支援の一環として広島団体が作成したものだという。また、資料館横の空地の土手には石炭の露頭がある。草に覆われた土手の一部が削り取られ、炭層を間近に見ることができるようになっていた。

次に訪れたのは常磐炭砒内郷砒中央選炭工場と水中貯炭場であ

る。いずれも、金属の構造物は解体され換金されたため残存しないが、巨大なコンクリートの構造物は現存しており、往時の姿を今に伝えている。中央選炭工場は3階部分が原炭ポケットになっており、そこから1階に下ろされ、選炭工程に入る。精炭は隣接する水中貯炭場へと送られる。酸化防止のために水中に貯炭していた。この仕組みを採用する施設は珍しく、常磐でもこの貯炭場のみである。ここで、内郷出身の野木氏と馬目氏が、幼少期の思い出として、ズリ山を遊び場としていたというお話を披露された。これは産業と人々の生活とが密接に関わり合う石炭産業ならではのエピソードと言えるだろう。



そして、選炭工場の裏手を上がっていくと、常磐炭砒内郷砒住吉一坑の2つの坑口が現れた。左が本卸、右が連卸である。その坑口には、石組みと赤レンガとが組み合わされた意匠が施されている。そして、さらにその上にはレンガ造の扇風機上屋が現存している。かつてここには、適正な坑内通気を保つため、排気用のシロッコ扇風機が

据え付けられていた。

2日目午前の巡検は以上である。いずれの場所においても、いわきヘリテージ・ツーリズム協議会の熊澤氏と常磐炭田史研究会の野木氏が、大きく引き伸ばした写真等の資料を掲げて詳細に解説して下さった。また、バス移動の車中でも、小宅氏の圧倒的な知識量とユーモアを背景に、いわき市についての様々な話が繰り出された。午前中のみでこれだけの箇所を回る非常に駆け足の視察であったが、得られた情報量は多く、非常に有意義な巡検となった。この場を借りて感謝申し上げたい。

(清水 拓：早稲田大学大学院)



3. 「全炭博研フォーラム」 in JOBAN

・基調講演「炭鉱閉山といわき市」 (小宅幸一：常磐炭田史研究会)

いわき市が「産炭地域振興臨時措置法」(産炭法)、「新産業都市建設促進法」(新産法)とどのように関わってきたのかについて講演が行なわれた。まず、1944(昭和19)年に入山炭鉱と磐城炭鉱が合併して常磐炭鉱(株)ができていく歴史について説明された。また、併せていわき地方の隣接する5市を中心としたライフラインや工業用水などを通した関係が示された。

産炭法、新産法の政策については、まず新産法の下では、都市開発が広域にわたることから投資効果が高まるよう、平市、磐城市、勿来市、常磐市、内郷市など14市町村が全国にも例を見ない規模で合併し、いわき市ができるにいたった背景が説明された。一方の産炭法は失業者対策として始まったが、昭和40年代半ばから、首都圏の工場による騒音問題等が浮上した事で、首都圏にあった工場がいわき市へ移されるようになり、い



わき市に雇用が生まれ、人口流出に歯止めをかける結果になった。

こうした中、いわき市の場合、広域合併は新産法によって促されたものであったが、相次ぐ炭鉱閉山を最小限の影響でとどめることができたのは、行政全体が大きくなり、これらの危機を支えたことによる。

ただ、このように二つの法律は市町村合併と大きな関わりをもって進められた中、目立たない法律であった産炭法が、日本のビックプロジェクトとして推進された新産法に比べ、石油危機によって新産法に飛躍的な期待ができなくなった際には、工業団地造成や雇用創出などいわき市に果たした役割は大きかった、と解説された。

・パネルディスカッション

① 石川孝織（鉦路市立博物館）「国内唯一の坑内掘り炭鉱があるマチ鉦路から」

鉦路コールマインの紹介が行なわれ、太平洋炭砒から鉦路コールマインに移行する中で、規模は3分の1に縮小するも400人・50万トン体制の生産を維持し、あわせて国の政策による対ベトナム・中国の研修事業（受け入れ・派遣）を行なっている状況などが説明された。こうした、現在も炭鉱が残っている地域にある博物館として、年1回以上の企画展を開催していることや、ラジオ放送に出演して語るなどの取り組みが行なわれていること、また市教委として小学校の空き教室に「太平洋炭砒資料室」を設置しているなどの取り組みが紹介された。

様々な情報がインターネットで得られ、交通網の発達でどこへでも出かけられる現代だが、こうした状況下で地域との「連携」が求められる場になっているとする、博物館の現状についても語られた。博物館はまちづくりの「知恵袋」であり実験の場であるという考えが示された。

② 青木隆夫（夕張地域史研究資料調査室）「夕張市の財政破綻と博物館～地域調査室の使命と活動～」

まず、全国の坑夫像を通して、何か分からないかという取り組みが紹介された。坑夫像の名前が「進発」から次第に「採炭報国」へと変わっていくことに注目し、夕張も同様の変化が起こっている事が報告された。また、坑夫像には必ずモデルが存在すること、油田地帯にも像の存在が確認されることが紹介された。

他に、夕張市の破綻の原因としては、炭鉱から観光へという流れの中で、交付税の減少や、観光への過渡な投資が挙げられる事実について語られた。また、そうした中で博物館は、誰が博物館を求めているのかを考え、求めに応じた対応を示していくことを目指さなくてはいけないと指摘された。

③ 渡辺文久（いわき市石炭・化石館）「博物館と地域研究団体との交流」

石炭を燃やすイベントを行っていることや、片寄平蔵が石炭を運ぶ時に使用した「御用」と書かれた旗を持つ馬を歩かせて、当時の状況を再現するイベントが行われている取り組みが紹介された。これらイベントには、地域の研究団体との連携は不可欠で、博物館と地域の研究団体の結びつきが紹介された。

④ 嶋崎尚子（早稲田大学）「炭鉱関連地域博物館と大学研究の協働」

炭鉱資料活用に関する取り組みと今後の研究者に求められる課題に関して紹介された。これによれば、常磐炭砒は閉山した際に、戦後の庶務、労務、経済、保安鉱務、組合創立以来の活動に関する資料全般を福島大学に移管しており、これは当時としては先見的な試みであった。自分達は常磐研究において大いに活躍してきており、現在は「地域資料は、地元で保管することが望ましい」と考え、石炭産業関連の資料レスキュー活動を実施している。常磐研究での成果についても、早急に地元へ還元すべきと考えている。

その受け皿となるアーカイブズとして、鉦路の「太平洋炭砒資料室」は好例である（他のアーカイブズと同じく、継続・維持という重要な課題は存在している）。さらに、鉦路市立博物



館が、資料利用の「ワンストップサービス」として機能し、かつ「既存資料を元に、新たな資料を発掘し、アーカイブズを再構築する」というサイクルを実現している点も参考になる。

これらから、大学もしくは研究者が貢献できる点は、①資料整理、②資料の価値判断・評価、③資料の関連情報の提供、④次世代研究者への橋渡しの4点であり、今後、常磐を始めとする産炭地域博物館との協働体制を整えていきたい、と意思表示された。

⑤ 脇 弥生（炭鉱を記録する会）「炭鉱を記録する会の活動と宇部石炭記念館との連携」

宇部での炭鉱・石炭に関する取り組みが紹介された。昭和44（1969）年、宇部に日本で最初の石炭記念館が作られ、モデル坑道（昭和45〔1970〕年併設）や、実際に東見初鉱山で最後まで使われていた櫓を移設し、展望台として使用している。

こうした中、11月1日に45周年を迎えたが、7月末には入館者145万人を達成した。2011（平成23）年1月には初めて嘱託の学芸員が入り、「炭鉱を記録する会」と「石炭記念館」との連携のもと、企画展や講演が行なわれている現状が紹介された。

他にも、常磐炭田史研究会が宇部を訪問する等、交流研究会が開かれ、他地域との交流も図られている現状が紹介された。

⑥ 大牟田市石炭産業科学館 中野浩志

「NPO受託の博物館の発展性と課題、世界遺産登録へ向けた博物館・ファンクラブの役割」

地元の機関では、地元のことは分かるが、他地域の炭鉱はよく分からないというのが現状であることが紹介された。また、大牟田では町中に産業遺産があり、国内出炭量の1割を担った遺産群があるのに対し、イメージとしては争議と事故といった点が強い傾向にあるとする、三池炭鉱に対する意識も示された。

博物館では、2001（平成13）年に設立されたNPOが、2005（平成17）年より一部事業を担うようになっている。NPOは市ができることはやっても仕方がないということで、地域に残っている遺産を回れるような取り組みなど、市ではできない視点から事業を推進している現状が紹介された。

・質疑応答

博物館等の機関では人が不足している現状があるとする問題が提起された。こうした中で、担当者一人で全ての活動を行なっていくことは難しいので、NPOと協力するなどして、問題に対する取り組みが行なわれているとする回答があった。加えて、各地の状況としては常磐のようにNPOにノウハウや知識の蓄積があるところばかりではないことから、今回の交流会のように、人同士が結びついていくことで、様々な面で協力することができ、仲間を増やすことができるのだと回答された。

4. ハワイアンズフラガールショー・温泉

来年度の全炭博研会場となる三池からの決意表明もあった懇親会后、スパリゾートハワイアンズの目玉であるショーを楽しむとともに、炭鉱衰退後の収入源としての観光業の発展、取り組みを視察した。

また、大規模な温泉に浸かることで、初日に視察した湯本地区の温泉を大いに利用した施設の状態を、実体験的に捉えた。

（高橋 史弥：三笠市立博物館）



3日目 10月20日(月)

1. 炭鉱遺産（湯本礦、鹿島炭礦）周辺見学

ホテルハワイアンズを出発した一行は、まずハワイアンズ敷地内で唯一の炭鉱関連施設である三井鉱山湯本礦「犠魂碑」を見学した。急勾配の丘の上にある碑になんとか辿り着き、見学・撮影し、みんなで手を取り合ってなんとか下りてバスに乗車した。「中村豊社長が常磐ハワイアンセンターを現在の地に決めた理由は、もしかすると三井鉱山湯本礦の跡地であったからかもしれない」と野木さんは解説した。

その後、鹿島炭礦跡地で下車し、小宅さんから説明を受けた。選炭場や炭住があった場所には木々が生い茂り、閉山からのときの流れを感じた。近くには産炭法によって造成された鹿島工業団地があり、炭鉱離職者のみならず、炭鉱の子どもたちも採用において優遇されたという。小宅さんをはじめ常磐炭田史研究会のみなさんによるガイドを拝聴しながら一行は小名浜港へと向かった。



2. 小名浜港見学

9時半から国土交通省東北地方整備局小名浜港湾事務所にて、小名浜港の概要について説明を受けた。2011（平成23）年に国際バルク戦略港湾（石炭貨物輸入）、2013（平成25）年に特定貨物輸入拠点港湾に指定され、主にエネルギー原料を輸入して後背地の電力・エネルギー企業などの各企業に供給しているという。また、東京電力小名浜コールセンターにはオーストラリア産の石炭が貯炭され、広野火力発電所にも移出されているとの説明があった。また、東日本大震災によって岸壁、護岸、荷役機械等に大きな被害を受けたが、応急復旧工事から本格復旧工事を経て復旧を遂げ、震災前の取扱貨物量に達しているという。

説明終了後、10時半からバス班・船班の2班に分かれて（前・後半で交代）小名浜港を海から陸からじっくり視察させていただいた。バス班はまず水産ゾーンを通り、アクアマリンパークと再開発エリアを通過した。この再開発エリアには2016（平成28）年3月にイオンモールが開業する予定であり、背後にある既成商店街をつなぐ活性化プロジェクトである。その後、3号埠頭に停車し、東港地区国際物流ターミナルにかかる予定の橋梁（建設中）を見学した。景観面に配慮したPCエクストラドーズド橋であり、建設費用はおよそ200億円とのことである。2015（平成27）年度の完成が待ち遠しい。その後、メガソーラーを右手に見ながら進み、石炭・金属鉱輸入埠頭に停車し見学した。残念ながら輸送船は停泊していなかったが、荷役機械を間近に見て荷揚げの様子を十分イメージできた。

バス班は漁港区に戻り、つぎに船に乗って海上から見学した。第二防波堤（建設中）と沖防波堤を左手に臨みながら南西方向へ進んだ。防波堤の切れ目では波が高く船が大きく揺れた。小名浜港南端まで進み、Uターンして岸壁を左手に臨みながら7号から1号埠頭を見学した。建設中の橋梁をくぐると魚の形をしたアクアマリンが見えた。

漁港、国際貿易港、そして商業エリアといくつもの様相を持つ小名浜港が今まさに復興のシンボルとして再開発されている様を見ることができた。貴重な機会を提供していただいた国土



交通省東北地方整備局小名浜港湾事務所のみなさん、常磐炭田史研究会のみなさん、そしてコーディネートしていただいた石川さんに感謝申し上げたい。

(笠原 良太：早稲田大学大学院)

2. 常磐共同火力勿来発電所

釧路コールマイン炭のユーザーであり、以前筆者が制作した「釧路石炭マップ」にも掲載している勿来発電所。ついにそこを訪れる機会が訪れた。全炭博研の常磐での開催は、とても楽しみにしていた行事であった。

勿来発電所につき、玄関を通る時にも「がんばっぺ！いわき」のステッカーが目に入った。きっと想像もできないような様々な困難を乗り越えて現在があるのだろうと思った。はじめに通された研修室では座ると正面に「ゼロ災害！よし！」というような掲示が目に入る。炭鉱でおなじみの言葉にホッとする…きっとそんな参加者は多かったはずである。



<時代の変化に合わせて>

発電所歴史についての説明を受ける。勿来火力発電所設立は、石炭産業が厳しい状況を迎えていた1955（昭和30）年。戦後の復興と共に電気の需要が高まってきた時代、地元の熱心な要望で常磐炭砵の低品位炭を活用する目的で始まった。

高度経済成長による電力需要の増大を支えるため次々と増設を行うが、1971（昭和46）年の常磐炭砵「大閉山」に伴い、重油も取り入れるためのパイプライン設備を整えなくてはならなくなる。1980（昭和55）年ころには、石炭と重油の混焼で環境にも配慮した当時の最新鋭8・9号機が建設される。さらに1985（昭和60）年には石炭を流体化するCWM実証実験、2000（平成12）年には発電コストを考慮し海外炭の消費拡大を図るために8号機を石炭専焼に、2008（平成20）年には7号機も石炭専焼にしコストダウンと電力の安定供給に努めてきた。さらに2011（平成23）年には炭化燃料や木質バイオマス燃料を導入。2013（平成25）年にはクリーンコールパワー研究所を吸収合併し、石炭ガス化複合実証機10号機として商用運転することとなり、CO₂削減に努めている。首都圏などの電力供給を支える使命を果たすため、様々に変化するエネルギー情勢に対応し、苦労や努力を重ねながら技術を進歩させてきた発電所という印象を受けた。

震災時に職員が撮影した映像では、1.5mの津波が発電所を襲う場面、タービンを止めたことによって蒸気が一気に煙突から出た場面などが映し出された。復旧作業に入ったのは4月20日だったが、夏の電力供給に間に合わせようと急ピッチで作業にあたり、7月の終わりくらいには稼働することができたという。これも電力の安定供給に努めようとする人々の、大きな使命感を持った仕事の結果であろう。

<環境に配慮した施設>

環境に配慮して建てられたという屋内貯炭場から見学を行った。10km先の小名浜港で陸揚げされる1日1万トンという膨大な石炭を、トラック約千台で運ぶという。ベルトコンベアの方が理想的だと思うが、なかなか現実とはならない、という話も聞かせてもらった。

長さ150m・幅100m・高さ35mという屋内貯炭場に入ると、目の前にピラミッドのようにきれいに積まれた石炭の山があらわれた。石炭の山はそれぞれ1種類からできていて、1日に使



う石炭の量は約1万トン。ちょうどその山1つくらいである。現在は25種類の石炭を使っていて、3～5種類の石炭を混ぜている。価格を下げるため、中国、内モンゴルの石炭とカナダに近いアメリカ北部の石炭を混炭して使っている。これまでに99種類使っているので、あと1種類で100種類になる。その100種類目は、どこの石炭になるのだろうか？とても興味深い話だった。

石炭の1割は灰になる。その8～9割はセメント会社へ行くが、残りは発電所から4km離れた自社処分場へ埋め立てる。工場敷地が住宅地に隣接しているため、環境対策には気を遣っている。8・9号機のタービン・発電機を見学では、ものすごい音の中での説明だったが、建屋の外に出ると全く音が聞こえない。防音対策を特に気をつけているという話は、納得だった。また敷地には木が多く植えられていて20%以上の緑化を心がけているのだそう。環境対策への意識の高さを感じることができた。



続くIGCC（石炭ガス化複合発電）の施設見学で、最初に通された場所が中央制御室。コンピューターがたくさん並ぶ中に大きな神棚が目立つ。地元の八幡様を奉り、月に一度の安全祈願をしていると丁寧に教えて下さり、労働文化がこんな最先端の発電所でも大事にされていることに感心した。

将来に向けて、廃棄物処分という点でもIGCCは優れている。灰をガス化炉内で溶かしてガラス状のスラグとして排出するため、容積はほぼ半減する。しかもセメントの原材料やアスファルト道路の路面材としてリサイクルすることができるという。

ガスタービンを回した廃熱を利用し蒸気タービンも回し効率をあげ、将来はガスタービンの温度を上げることで48～50%の熱効率を目指せるというIGCC。貯炭場や送電線などのインフラが整っているという理由で勿来発電所が選ばれたというが、職員の謙虚さ勤勉さも何より優れているのだろうと思った。

<見学を終えて>

見学終了後の研修室での質問では、興味深い質問が次から次へと参加者から出てきた。どんな質問にも丁寧に答えてくれる

職員に、もっともっと話を聞きたい！名残惜しい！という雰囲気であった。全炭博研のメンバーは、本当に勉強熱心な方達の集まりなのだ。

「日本の場合、石油を使う火力発電所はもうつくれない。これからは天然ガスと石炭高効率の技術を売ることが今後の方向性となるだろう。」という言葉が心に残った。それは日本の将来は、原子力発電に頼らなくても大丈夫！石炭ガス化複合発電は任せとけ！という心強い言葉に聞こえたからだ。

わき出てくる温泉とその熱に苦労しながらフンドシー丁で働いていた先人の努力に敬意を持っている地元の人達を多く採用しているという勿来発電所。低品位炭を活用する技術に努め、様変わりしてきたエネルギー事情に合わせ、柔軟に対応することができてきた発電所であるからこそ、今後の更なる発展が期待できる。世界が石炭資源からのエネルギー確保の重要性を認めざるを得ないと感じるこれまでの実績を確信できた今回の体験を活かし、子ども達に伝える方法を模索していきたい。

最後になりましたが、長い時間にわたって丁寧に対応して下さいました勿来発電所



の職員、全炭博研を主催・運営して下さり貴重な研究の機会を与えて下さった皆様に心から感謝致します。

(釜范 陽子： 釧路市立城山小学校)

3. 炭田カフェ

一行は16時25分にルートインいわき駅前へチェックインののち、いわき商工会議所会議室をお借りしての「炭田カフェ」で一日を締めくくった。18時20分から18時35分まで第一部として釧路の初等教育現場における実践報告と質疑、第二部は18時49分から閉会時刻まで、釧路・常磐・西彼杵各炭田のOBによる4件の炭鉱メモアール(回想)である。

釜范 陽子 (釧路市立城山小学校)

現行の小学校教育課程で石炭に関わる部分は、3・4年生社会科の「郷土の産業・歴史」、6年生理科「土地のつくり」である。国内唯一の坑内掘り炭鉱、釧路コールマインがある利点を活かし、3年生では石炭ストーブの燃焼体験とコールマインの見学や発電実験。4年生では炭鉱OBから太平洋炭鉱当時の話を聞く機会などを設けた。また、総合的な学習の時間では「地図をつくる」活動を行った。釧路石炭マップ(当日配布)は成果の一部で、1万部を印刷し教育関係者のみならず多くの市民や観光客に好評であった。(2年目の石炭マップⅡは「第22回 私たちの身のまわりの環境地図作品展」で全国一、またこれらの取り組みは「エネルギー教育賞」(主催：電気新聞)において2年連続優秀賞)。



三輪 紀元 (もと雄別炭鉱)

どの会社にも仕事の出来る人・そうでない人が居り、石炭産業も例外ではなかった。学校での成績が優秀で将来を嘱望され炭鉱へ入社したにもかかわらず、仕事は上手いとは言えない事例もあった。その場合、会社では対抗馬を立ててラインからはずすことが行われた。雄別炭鉱の閉山処理を見届けて転職した富士通では、社員の間で会社の悪口や業績の低下云々が口にされることは無かった。必ずしも優秀とはいえない人物でも、その人の存在価値を会社側が正当に示してくれれば、石炭産業の多くは生き残れたのではないかと思う。炭鉱の閉山時は人間性が表れるものであるが、考えさせられるところが多かった。



木山 利昭 (もと池島炭鉱)

西彼杵炭田の長崎県大島で生まれ、定時制高校で学びながら池島炭鉱や石川島播磨重工で働き、現在は池島中央会館の管理人を務めている。現在に至るまでの回想をお話する。池島へ戻ったのは1980(昭和55)年で、この時の手取は月14万円であった。1983(昭和58)年に結婚し、福利厚生を整った炭鉱住宅に住み、給与も30万円に上がった。仕事は仕業前点検(機械の焼き付きが起こらないよう注意深く点検と調整を行う)、パン



ツァコンベアやスクレーパーの維持管理が中心であった。このような思い出深い池島炭鉱も、2001（平成13）年11月30日に閉山を迎えた。炭鉱労働や労働組合についても思うところが多く、簡単にお話する。



佐藤 富喜雄（もと太平洋炭鉱）

釧路市の太平洋炭鉱は82年に及ぶ歴史を持つが、他山とは異なる点がある。第一は、立地条件に恵まれた都市炭鉱である。第二は職制と労働組合で、当初は職員労組と鉱員労組、2つあった組合が後に統合された。このような事例は他山では珍しい。太平洋の第三の特色は、1963（昭和38）年に始まった持ち家制度である。炭鉱で住宅は会社が用意するのが普通であるが、太平洋は都市炭鉱であることに加え、将来を見据えた構想のもと、この制度を推奨し、導入から数年のうちに持ち家率は70%に達した。上記も背景として、太平洋では1965（昭和40）年までに「身分制度」は解消されるに至った。

秋元 高義（もと常磐炭鉱・石炭技研）

炭鉱は金属鉱山とは異なる特色があり、人間味に溢れたところである。1953（昭和28）年、東大工学部鉱山学科へ、後に常磐炭鉱の会長となる大貫経次先輩が訪ねてこられた。これを契機に常磐への入社が決まり、見習係員（初任給は1万2千円）、保安試験の資格取得、上級保安現場員などを経て閉山前は副長の職にあった。1954（昭和29）年から74（49）年の在職中、常磐炭鉱は勿論のこと、他山や石炭技術研究所で保安および採炭技術の進歩を目の当りにすることができた。なかでも私の機械化では苦心を重ね、改良へ繋げた。常磐炭鉱が他山と大きく異なるのは、高い地温と温泉であろう。1トンの石炭を掘るのに40トンの温泉水が湧き出してくるところである。



弁当とビールをいただきながら、前日までの講演スタイルとは異なる雰囲気では話が盛りあがった。5件の発表は勿論のこと、上野行列車の出発時刻ぎりぎりまで話に聞き入りメモをとるJAFCOFの若手研究者の姿勢にも感銘を受けた。貴重な話題を提供して下さった5名の皆様、会場の確保から和やかな雰囲気づくりに至るまで種々のご高配をいただいた常磐炭田史研究会の皆様にお礼を申しあげる。

（鮎沢 潤：福岡大学）

4日目 10月21日(火)

1. 高萩炭礦資料館

前日の「炭田Cafe」と田町にて、語り明かし飲み明かした疲れを感じる暇もなく、ついに最終日を迎えた全炭博研in常磐。一行は、常磐炭田の南端である茨城県北部へと向かった。

道中、常磐自動車道の車中で一人物思いに耽り、昨晚の田町での会話を反芻した。平成25年11月、湯本「芸の虫」の方々に田川市で常磐炭坑節を披露していただいたが、その時のお一人が、先日たまたま見えていたNHK「鶴瓶の家族に乾杯」いわき市編に、なんと登場したのである。「あれは本当にアポなしで、突然来てびっくりした

わ」とのこと。さすが公共放送はヤラセがないと改めて感心している間に、バスは目的地の「高萩炭礦資料館」に到着した。

私自身は、三回目の訪問となった。初めてお連れいただいたのは、開館前の2010（平成22）年8月末頃と記憶している。当時は開館に向けて準備を進められている最中であつたが、このような立派な資料館として実を結ばれたことは、関係者の方々の並々ならぬ努力の賜物と感心しきりである。

2012（平成24）年に開館した高萩炭礦資料館は、「菊池寛実記念」と冠がつく。菊池寛実（1885～1967）は栃木県出身の



実業家で、1940（昭和15）年に高萩炭礦(株)を創業した。同炭鉱は高萩・櫛形坑を主力とし、常磐炭田南端の炭鉱として発展したが、高萩坑が1967（昭和42）年、櫛形坑は1973（昭和48）年に閉山した。炭鉱事業は終了したものの、京葉ガスなどの事業は後継会社として現在も継続しており、炭鉱跡地もゴルフ場等に利活用されている。

資料館では2班にわかれ、それぞれご案内いただいた。屋外では黄色に再塗装された炭車が3台並んでいるが、1台は形態が異なっている。そういえば初めて訪れた開館前の2010（平成22）年、「展示する炭車がほしい」「釧路にありますよ」という会話が聞こえたような記憶があるが、説明文には高萩で使用された炭車とあるので、おそらく気のせいであろう…。（編集注：2台は釧路より譲渡）

外壁には蔦が絡まり一見して美術館風であるが、坑口を模した入口は紛れもなく炭鉱の資料館である。展示室は二つに分かれており、高萩炭鉱を中心とした炭鉱用具、写真、ジオラマ、図面、年表が展示されていて、高萩炭鉱が一瞥して理解できる展示となっている。

炭鉱関係資料館の見学では、いわゆる両ツルやだるまストーブなど、九州（筑豊）の炭鉱では見られない資料を発見して悦に浸ることを秘かな楽しみにしている。その中で特に驚くのが、坑内図の展示である。筑豊では鉱害等の関係から、坑内図を外に出すことはない。こんなに堂々と坑内図を筑豊で展示すれば、まず、しかけられます（*福岡県田川地方の方言。標準語で「攻められます」の意）。炭鉱道具のみならず、鉱害に対する炭鉱の地域差も見出され、多くの示唆を与えてくれた展示であった。

（話は変わるが、同館への二回目の訪問時に、高萩地方の友子関係資料を多く拝見させていただいた。常磐のみなさん、全炭博研で友子に関心のあるみなさんとぜひ共同で調査できればと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。）



2. 共楽館

高萩を後にして、炭鉱ではないが日立鉱山へと向かう。その導入が、日立鉱山の旧娯楽施設「共楽館」である。前回の全炭博研で見学した嘉穂劇場（筑豊/飯塚市）と同様、鉱山に係る芝居小屋で、両者とも「全国芝居小屋会議」に加盟している。以前、嘉穂劇場にて共楽館の話がでたような記憶を、今さらながら思い出す。

話は逸れるが、平成27年のNHK大河ドラマ「花燃ゆ」は、吉田松蔭以下の明治維新に大きく関わった長州藩士を題材とする。日立鉱山の創業者である久原房之助（1865-1965）や、その叔父で石見銀山などを手掛けた藤田伝三郎（1841-1912）、また、久原の義兄で日産財閥を興した鮎川義介（1880-1967）は、全員が現在の山口県

出身である。ドラマに描かれる長州藩の猛々しいエネルギーが、明治以後鉱山事業にも注がれるようになった。一方で、長州藩が主体となった新政府軍が会津若松城を落としたのは、2013（平成25）年の大河ドラマ「八重の桜」でも描かれたとおりである。果たして、長州出身の久原が経営する日立鉱山の労働者の故地はどこだったのか、ご存知の方がおられたら教えてください。



さて、赤い屋根が一際目立つ共楽館は、比較的狭隘な谷あいに所在する。周辺には「白銀町」「宮田町」などの地名が残っており、かつての日立鉱山の集落が広がっていたことが想像される。共楽館は日立鉱山の福利厚生の一環として、1917（大正6）年に竣工。歌舞伎や活動写真、映画や講演会などの娯楽施設であったばかりでなく、情操教育の醸成など学校教育にも活用されたようである。しかしながら、昭和30年代以降のテレビの普及などの社会情勢の変化から、1967（昭和42）年には日立市へ寄贈され、現在は武道館として利用されている。



現地では、市毛環さん（NPO法人共楽館を考える集い）にご案内いただいた。一行はまず建物外周をめぐる。赤い屋根の建築物は日立鉱山の技師が設計を担当したため、男性的で丁寧な作りであるという。全体は木造の壁だが、一部銅カラミの壁が残っているのはさすが銅鉱山の施設である。

一方、木造の外観と中の武道館（体育館）の施設は、とても対照的である。例えば階段など、昔の芝居小屋の面影は一部伺えるものの、建物内側は現代的な武道館であり、外観とのギャップが著しい。私のような建築の素人が何も情報がないまま現在の共楽館を眺めると、芝居小屋の面影を探すのは少々難しい。玄関入口に掲げられた「日立市武道館」の看板の横に、国登録文化財のプレートが並べてあることが、とても印象的である。



とはいえ、地元では共楽館を日立市の貴重な文化遺産として、さまざまなイベントを実施し、保存と活用を図っているとのことである。大正時代の木造建築を残していくことは、非常に難しいことは言うまでもなく、ご案内いただいたNPOの方々や日立市の

みなさんの理解と活動には頭がさがる思いである。国登録文化財の制度がそうであるように、文化財的な建造物は、保存はもちろん、十分な活用を図ることが肝要である。そうすることで、貴重な木造建築とともに、建物の「記憶」や歴史的意義、あるいは関わった人々の思いまでも後世へ伝えていくことができよう。鉱山娯楽施設の往時の記憶を呼び起こすような、魅力ある活用策を期待したい。

（福本 寛： 田川市教育委員会）

3. 日鉱記念館

日鉱記念館はJX日鉱日石金属グループの足跡と創業者である久原房之助精神を伝えるために設けられた。久原は後の藤田財閥となる親戚の経営する別子・小坂・足尾といった鉱山開発を支え、特に小坂の立て直しに奮闘した。当時の小坂鉱山では硫黄は焼いて飛ばしていたが銀山だったのでうまく行かなかったため、銅鉱山に転換し

生鉱焼きを導入した。久原は小坂鉱山に10年ほど勤めてから赤沢鉱山を買い取って日立の開発に着手した。困難期には久原の居た小坂鉱山から100人ほど出向していた。開業時は常磐線がいわきまで開通したので、日立駅までは自前で鉱山電車を開通させた。

日立では金属鉱山では初めてボーリング調査を導入した。76年間で約700kmの坑道を掘り、4000万トンを探掘し銀を40万トン出荷、金もわずかに取れていてインゴットも出荷していた。削岩機を使用するため450馬力コンプレッサを導入していたが、当時の削岩機は日本人の体格にあわなかった。一口に削岩機とは言っても採掘方向によって名称が異なっている。地下にも立て坑が作られていて、鉱石運搬であれば1分100m上昇することが出来た。当時の立て坑櫓は現在保存されている立て坑櫓の場所に木造で建っていた。排水処理のために今でも斜坑が2つ残っていて、150mまでは当時のまま現存してる。坑内湿度は90%にもなるため鉱夫は基本的に裸で作業を行っていた。良い鉱脈に着任出来るように、毎朝担当場所の取り合いになっていた。日立の銅の含有量は5%と、現在輸入している鉱石の0.5%と比較しても高品質であったが現在は枯渇した。

鉱石は浮遊選鉱（粉碎して薬品で泡状にして選別する）していたが、硫黄と鉄が多くて亜硫酸ガスで苦勞しており28mのダルマ煙突を建設する運びとなった。大煙突は公害になると当時は考えられており「アホ煙突」とも呼ばれたが、火山を参考にして気象観測を行って社長自ら大煙突にすることを決めた。市が気象観測所を運営するのは珍しく、鉱山から移管した日立市の他は八王子市くらいである。大煙突の設計は大学出たばかりの技術者が行い、亜硫酸ガスの熱を吸収するように二重構造になっていて、その部分は倒壊を免れた。煙害問題には地元との協力が要するため補償と話し合いが丁寧に行われ、述べ3万6千人の人夫を費やし、3月に着工して12月には完成した。建設当時は煙突の高さのあまり来なくなる鳶職もいたが、それでも全国から高い給金を払って呼び寄せた。足場は金属で組むとすぐ錆びてしまうため白縄が用いられ、単に硬く締めると足場が組めなくなるため職人技を要した。

煙突の上には観測所を作り、簡易エレベーターで昇り降りするようになっていた。煙突の完成後に再び気象観測を行って、ようやく操業を開始した時は足腰の曲がりかたが治るほど感動したと言われている。大煙突はアメリカの世界一の煙突に対抗してかさ増ししたおかげで約2年間は世界一の座に輝いていた。煙突の厚みは4cmほどで、コンクリートの圧縮強度は290から350と、現在の基準200から250を超える強度を誇っていた。1960年代には有毒物質も再利用できるようになったが、それでも煙突の存在は地元に戻って来た気持ちになるシンボルであった。倒壊前には側面にいくつも穴が空いていたが、何の前触れもなくある日、気付くと音もなく倒壊していた。



4. 小平記念館

小平記念館は創業者小平浪平翁の偉業と創業の志を永く後世に伝えるため、小平の没後5年の1956（昭和31）年、製作所敷地内に建設された。設計は東京大学の安田講堂と同じ内田祥三のである。9階の展望台からは常陸那珂埠頭工場・風力発電所・東海村原子力発電所・国分工場、山の上には日立研究所、そして背後には関東平野が広がり、大瀬地区・小平台・海下地区が一望出来る。大瀬地区には頭文字Oに加えてAからZまで棟番号があり、タービンブレード生産建屋やOF棟(大型水車)・OE棟(ガスタービル試験棟)・安全体感トレーニングセンター（安全帯などの研修施設）などがある。屋内硬式野球部練習場や野球場、体育館やテニスコートなどの福祉施設、技能五輪センターのトレーニングセンターなども敷地内に用意されている。日立総合病院は茨城県北部では最大で救急センターやドクターヘリを備えており、震災後はずっと耐震補強工事が続けられている。、海下地区はAからZまであって発電機や大型タービンを製作しており、450トンもの重量物を分解して日立港まで運ぶ際は海沿いの国道を通行止めにして歩道橋を跳ね上げるようになっている。この一帯だけで3千人の工具に加え、三菱日立パワーシステムズなどの合弁会社の社員も居る。

小平台の丘陵地は戦前は防空壕を張り巡らせ、終戦時は8千人が収容できるようになっていた。この防空壕が地下工場と見做されたため、1945（昭和20）年6月10日に1トン爆弾が518発落とされた。前日の昭和天皇の視察日で代休だったこともあり、出勤していたのは約1千人であったが、600名ほど亡くなったために工場を止めて森にした。昨年も陸上自衛隊が爆発物処理を行うなど未だに不発弾が見つかり、森の中には1トン爆弾によって空けられた20m、深さ10mの穴を保存している。

日立の工業用水は久慈川から取水しており上水道も日立製作所が建設して市に譲渡し、かつては病院だけでなく看護学校も整備していた。従業員の福利厚生にゴルフ場所を提供したのは日立が初めてで、他にも従業員育成のために授業料免除奨学金ありの全寮制の専門学校も設立した。高校の授業に比べると4倍の実習があり、日立入社後にさらなる研修も選ぶことが可能で、大学の講義も受けられる。また茨城大学工学部は小平氏の寄付で作られた。博士1人で3人の弟子を養成するという精神で、博士号の学位を持った研究者の集いが設けられ「変人会」（のちに日立返仁会）を作った。日立研究所には現在約4,900人の研究スタッフがいる。

ここで展示されている日立初の電動機「5馬力誘導電動機」は103年前に作られたもので、茨城県文化財となっている。重さは120kgで日立製作所の設立前なので日立マークがついていない。日立のマークを初めて使い出したのは変圧器からである。日立マークの外周は太陽のフレアを意味しており、現在は家紋の扱いになったため家電製品には使わなくなった。社章についても統合で使わなくなったが、稀に事業所の湯呑みとして残っていることがある。創業当時の作業小屋はガラス戸はなく吹きさらしだったので布を貼っており、「かのオンボロ小屋をいかにして威厳を保つか」が命題であった。創業当時は製図用の烏口1本で2週間くらいで図面を書いており、当時の絹製の図面も展示されている。鉾山電車を走らせるための発電機に加え、日立鉾山では工具を壊してでも掘る体質だったために工具の修理が忙しかった。この時5人で創業した会社が今はグループ全体で32万人となった。

以上のように、現在の日立グループの存在のほとんどの原点が日立鉾山にあると言える。かつては鉾山師と呼ばれていた鉾山の開発が近代化される過程において、鉾山同士の横のつながりや資本家の長期的な出資など、企業活動という枠組みを越えた人情味を窺い知ることが出来た。また、近代化した鉾山を支える工業技術も輸入品の保守から徐々に国産化へと成長していき、やがて鉾業自体を追い越していこうとする産業の成長を1日で学ぶことが出来た。坑内作業における技術革新に加えて有害物質対策や労働者の居住環境などの多岐に渡る問題を技術面や企業倫理によって克服していった過程、常に研究を怠らない企業姿勢など、非常に有意義な体験が出来たと思う。

（松村真人：NPO法人J-heritage）